様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：２４３０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2012～2013
課題番号：２４８２００１５

研究課題名（和文）江戸期上方歌舞伎の音楽演出に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Fundamental Study on the Musical Techniques in Kamigata Kabuki in the Edo Period

研究代表者
前島　美保（MAESHIMA, MIHO）

京都市立芸術大学・公私立大学の部局等・非常勤講師

研究者番号：４０４３６６９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円、（間接経費）　　360,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、江戸時代の上方歌舞伎における音楽演出がどのように組み立てられていたかについて、台帳（台本）に基づき明らかにすることをめざしたものである。『歌舞伎台帳集成』を典拠に音楽演出（囃子名目等）を抽出・リスト化する作業を経てわかってきたことは、囃子名目の初出を遡る例や従前には知られていなかった演出技法など、極めて豊富かつ具体的な用例の数々である。本研究で得た基礎データの慎重な分析と解釈が、今後の課題となる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the structure of the musical techniques of Kamigata Kabuki in the Edo period by examining Kabuki texts of the time. The research of many volumes of the Kabuki texts discovered some musical techniques that were previously unknown. Moreover, it revealed that some of the first appearances of musical techniques named Hayashimyomoku dated back further than what were believed. It requires further detailed investigation to analyze and decipher fundamental data of this research.

研究分野：日本音楽史

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：近世　歌舞伎音楽　上方歌舞伎　演出技法　台帳（台本）　囃子　黒御簾音楽

１．研究開始当初の背景

歌舞伎は、役者の衣裳や化粧、舞台装置など視覚的に洗練されてきた芸能であるが、一方、音楽の果たす役割も小さくなく、舞台演出に欠くことのできない一要素となっている。特に芝居における音楽（黒御簾音楽、下座音楽、陰囃子）は、登場人物の置かれた状況や情景描写などを効果的かつ象徴的に演出し、芝居の理解を助ける働きをしている。歌舞伎音楽の演出の工夫は、いつ頃どのように生成し、展開してきたのか。

こうした歌舞伎の音楽演出の変遷に関する研究は、従来、詳細な音楽分析を可能にする附帳という史料を中心に進められてきた。附師によって記された附帳には、芝居の進行に即して、どの音楽や鳴物を、どのように演奏するかがきめ細かに書き留められている。ところが、現存附帳の大半は明治期以降のものであるため、江戸時代の音楽演出についてはほとんど具体的に研究がなされてこなかった。江戸時代の歌舞伎の概説書ないし百科事典的性格を有す劇書類にも、囃子名目として音楽演出がリスト化されることはあったが、芝居における使用例が明記されないことが多く、江戸期の具体的な様子を描くことができない。

そこで本研究では、役者の台詞、動作、大・小道具、音楽などを狂言作者が書き記した台帳（台本）という史料に着目し、これを積極的に活用することで、江戸時代の歌舞伎音楽の上演実態に迫り、近世以来の歌舞伎音楽演出史の総合的な考察や解釈につなげることを企図したものである。

２．研究の目的

本研究は、江戸時代の上方歌舞伎において、音楽演出がどのように組み立てられ、生成・展開したかについて、これまで音楽史料としては十分に活用されてこなかった台帳を基に、具体的に明らかにすることを目的とする。対象を上方とした理由は、江戸期を通じて上方歌舞伎の台帳が比較的豊富に現存すること、とくに古いものは上方の台帳に多いこと、等による。江戸期の台帳には未翻刻のものや、すでに活字化されていても、台帳の系統弁別等の目的から原資料にあたって考証が必要なものなどがあり、最終的にはそうした吟味が欠かせないが、今回はひとまず対象を『歌舞伎台帳集成』に絞り込んだ。ここから作品ごとに音楽演出（囃子名目）を抽出・入力し、演出技法を分析するための基礎データを作成することを第一義にめざす。また、その基礎データに関連した史料の収集、ならびに基礎データの考察や解釈とも関わる歌舞伎の音楽演出や型に関する先行研究や芸談、上方の附帳の予備調査、および音声資料の調査等の周辺資料調査も適宜進め、歌舞伎音楽演出史の見通しを立てる一助とする。

３．研究の方法

（１）『歌舞伎台帳集成』から音楽演出の抽出・データの入力

江戸期の上方歌舞伎の台帳の所在については『歌舞伎台帳所在目録と書誌調査』に詳しく、この研究成果に基づき、多数の歌舞伎研究者が関わって翻刻集成されたのが『歌舞伎台帳集成』（全 45 巻）である。ここには、宝永七年（1710）大坂荻野八重桐座上演の現存最古の歌舞伎台帳「心中鬼門角」から安永九年（1780）までの江戸中期の台帳が網羅的に収載される。今回は、個人研究であることや今後の研究の展開を考え、この『歌舞伎台帳集成』に依拠して音楽演出（囃子名目等）を抽出することに集中した。『歌舞伎台帳集成』に収載された作品は 130 を超え、中には数は少ないものの、江戸で上演されたものも含まれる。今回はこうした江戸歌舞伎で使用された台帳からもデータを集積して、比較考察の材料とした。

時代や作品、台帳の性格等にもよるが、『歌舞伎台帳集成』に拠れば、江戸中期の歌舞伎台帳にはいずれの作品においても、何らかの音楽演出の記載が見られ、また一作品につき音楽演出に関する記載が五十を超えることも少なくなく、こうして集積された基礎データは膨大な数となった。

（２）周辺資料の調査・収集

以上と併行して、歌舞伎の音楽演出に関する諸論文や芸談の収集、景山正隆氏の論考を踏まえて江戸時代の劇書に見られる囃子名目の収集と検討を進めた。また、杵屋富造旧蔵附帳の調査に着手し、一方、大西秀紀氏のご協力を賜りながら音声資料の発掘も手掛けるなど、近代以降の上方歌舞伎音楽の伝承にも注視した。いずれも継続調査を必要とする。

４．研究成果

（１）台帳に基づく江戸時代の上方歌舞伎音楽

先述の通り、こうして集積された基礎データは膨大な数に上るが、これらを一つ一つ慎重に分析し解釈することで、江戸時代の上方歌舞伎の音楽演出の特徴を具体的に把握することが可能となったと言える。今回作成された基礎データが、今後の研究に資するところは少なくないと思われる。

いくつか具体的に事例を挙げる。例えば、寺院の場面や淋しい場面、あるいは土手場などに演奏される「禅の勤」という囃子がある。この「禅の勤」の初出は、従来、六代目田中伝左衛門の「芝居囃子日記」に基づき、宝暦十四年（1764）三月江戸市村座で五代目市川団十郎と三代目市川団蔵出演の芝居の中で、藪かげより六部の出になる所に打ちこんだ

のが最初とされ、小鼓を能くした江戸の囃子方西嶋吉之丞作調と言われてきた（『日本演劇辞典』、『歌舞伎年表』など）。ところが、宝暦二年（1752）三月大坂中の芝居にて上演された「九州苅萱関」大切に「ト禅の勤めにて　花道の切穴より下へ抜け　切穴へ出て本舞台へ来り」とあるなど、宝暦十四年以前の上方台帳にはすでに「禅の勤」の用例が散見される。「禅の勤」は、従来説をやや遡って、上方においてすでに使用されていた可能性がある。

また、演出技法に変遷が見受けられるものもある。例えば、大詰の幕切などに演奏されていた「和歌」である。「和歌」という囃子は現在行われないが、十八世紀の前半の台帳には、「是にて　和歌　幕也」（享保十七年（1732）「傾城妻恋桜」）、「ト和歌にて　打出し」（享保二十年（1735）「山椒太夫五人跨」）などと記され、しばしば「和歌」の囃子で幕切となった。ところが、明和期以降「和歌」の記載が減り、「しゃぎり」が散見されるようになる（明和七年（1770）など）。江戸時代の劇書には、幕末になっても「和歌」の囃子名目が挙がっており、また囃子名目の「和歌」と「しゃぎり」が実体として同じかどうかも検討の余地があるものの、少なくとも、台帳にみる幕切の囃子の述語には変遷が見受けられる。

一方、歌舞伎における琴（箏）の使用は、江戸中期を通じて行われていた可能性が高い。「琴三味線鼓太鼓にて幕開く」（享保八年（1723）「大塔宮曦鎧」）、「幕の内より　琴の入りし和らか成歌にて　幕開く」（宝暦七年（1757）「大伴黒主百夜車」）、「本管弦　琴入にて」（安永六年（1777）「天満宮菜種御供」）などの例がそれにあたる。従来、琴はとりわけ初期歌舞伎において用いられていたようにも考えられてきたが（『日本音楽大事典』など）、江戸時代の比較的長期にわたって、琴の音色が歌舞伎の音楽演出に果たした役割を想定する必要があるものと思われる。

地歌「由縁の月」は鶴山勾当作曲として知られ、元文五年（1740）床開きが初演と目されている（『摂陽奇観』）。歌本には寛延四年（1751）刊『糸のしらべ』に初出する。この曲は、現在「廓文章」など夕霧物に欠くことができないが、台帳では宝暦七年（1757）正月京四條通北側西角大芝居の「傾城里大集」五つ目にて、「座頭の形にて　縁りの月を歌い歌い出る」とあるのが早い例として知られる（宝暦八年にも事例有）。流行りの歌を、即時に上方歌舞伎の中に取り入れられている様子が窺われる一例である。

以上は数多ある事例のうちの数例であり、いずれもさらなる検討を要するものだが、このように台帳という上演実態に近い史料から、具体的に囃子名目の初出や来歴、作品ごとの演出の変遷等の再検討を積み重ねることによって、新たな江戸時代の歌舞伎音楽演出史の側面が切り開かれていく可能性があるものと考えられる。またそのためには、台帳に先行する絵入狂言本や後続の附帳などを、包括的に調査分析してゆくことが鍵となることも予想される。今回は台帳にみる上方歌舞伎の音楽演出の体系化や明確な結論を得るには至らなかったが、抽出した基礎データを基に、継続して検討してゆきたい。

（２）その他

SP レコードなど音声資料に残された阪東小三郎、阪東徳三郎、中村新三郎等、明治末期から大正昭和にかけて活躍した上方歌舞伎の囃子方の演奏は、開放的な甲高い声、賑やかな囃子、地歌など、独特の音色に包まれていたことが判明した。同時代の江戸・東京系の歌舞伎囃子方の音源と比較するとその差異は鮮明で、近世以来の上方特有の伝承の一端がこうした音源事例から具体的に看取された。むろんこうした指摘は、すでに町田博三（佳声）、渥美清太郎、杵屋富造、杵屋栄左衛門等、数々の芸談や論評によっても知られていたものだが、今回の音声資料の発掘によって実際に耳から確認することができたことは意義深い。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①<u>前島美保</u>、「歌舞伎囃子方の東西交流―宝暦期から天明期にかけて―」、『日本伝統音楽研究』第 10 号、1～21 頁、2013 年、査読有

〔学会発表〕（計 5 件）

①<u>前島美保</u>他、「「18 世紀音楽」新考―地域を越えた音楽史学の可能性―」、日本音楽学会第 64 回全国大会ラウンドテーブルⅢ、2013 年 11 月 3 日、慶應義塾大学

②<u>前島美保</u>、「上方歌舞伎の囃子の世界」、平成 25 年度第 4 回伝音セミナー、2013 年 9 月 5 日、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

③<u>前島美保</u>、「上方歌舞伎の黒御簾音楽研究について」、第 35 回公開講座「黒御簾音楽を探る―芸談と資料研究―」、2013 年 2 月 3 日、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

④竹内有一・<u>前島美保</u>、「歌舞伎音楽入門―江戸と上方―」、平成 24 年度でんおん連続講座 D、2013 年 1 月 15 日～29 日、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

⑤<u>前島美保</u>、「上方歌舞伎を聴く―「雁のたより」―」、平成 24 年度第 5 回伝音セミナー、2012 年 10 月 4 日、京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター

〔図書〕（計 2 件）

①竹内有一・土田牧子・前島美保編、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、『黒御簾音楽を探る―芸談と資料研究―』（公開講座配布パンフレット）、2013 年、63 頁

②土田牧子・前島美保他、社団法人伝統歌舞伎保存会、『平成 24 年版歌舞伎に携わる演奏家名鑑』（文献資料一覧）、2012 年、227～261 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

前島　美保（MAESHIMA MIHO）
京都市立芸術大学・公私立大学の部局等・非常勤講師
研究者番号：40436697